

団体の概要 (N G O / N P O 用)

団体名 NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティ

所在地	〒061-0206 北海道石狩郡当別町川下754-11 TEL: 0133-22-4305 FAX: 0133-22-2263 E-mail: tectec_ee@ybb.ne.jp		
ホームページ	http://www.geocities.jp/tectec_ee/		
設立年月	2002年 3月 *認証年月日(法人団体のみ) 2002年 3月 7日		
代表者	山本幹彦	担当者	山本幹彦
組織	スタッフ 4名(内専従 4名)*ボランティアスタッフ20名 個人会員 25名 法人会員 名 その他会員(賛助会員等) 1名		
設立の経緯	2002年、環境教育を主な目的としたNPO法人 当別エコロジカルコミュニティを設立。		
団体の目的	この法人は、当別町を主なフィールドとし、町内外の幅広く分野を越えたネットワークを大切に持続可能な社会を実現するために、生涯学習の視点に立った環境教育事業やコミュニティの環境の保全はもとより、まちづくりや子どもたちの健やかな自己を涵養する事業等を行い、社会全体の利益の増進に寄与することを目的とする。		
団体の活動プロフィール	2005年度の活動内容を紹介する 1) 持続可能な社会を実現するための教育 環境の村事業【北海道委託事業】 「あぜ道とせせらぎ」プロジェクト【文部科学省委託事業】 国営滝野すずらん丘陵公園環境教育プロジェクト【(社)公園緑地協会委託】 インタープリテーションデザインワークショップ【主催事業】 地域用水セミナー「みくまりの郷再発見」【土地改良区委託】 子ども自然体験フェスティバル【国営滝野すずらん丘陵公園】 王子の森自然教室【(社)日本環境教育フォーラム】 *王子製紙(株) 地域子ども教室「当別みどりの居場所作り」 滝野森の楽校【国営滝野すずらん丘陵公園】 子どもパークレンジャー【(社)日本環境教育フォーラム】 ムッレ教室【(特)自然体験推進協議会】 親子でチャレンジ ネイチャーワールド2005【NPO法人 チャオ】 森の幼稚園【主催事業】 2) 持続可能な社会を実現するために、オルタナティブな生活文化を生み出し発信。 冬水田んぼ勉強会【創地農業21】 牛が拓く公園作り【創地農業21】 3) 当別町道民の森における環境教育事業。 当別町アウトドアプロジェクト【当別町委託事業】 道民の森・森林環境教育プログラム(ワンダースクール)【石狩支庁】 森のクッキング教室【道民の森管理事務所】 4) 環境教育や環境保護に関わる団体、個人のネットワーク形成。 アースデイとうべつ【主催事業】 環境教育リーダー基礎講座【環境省】 5) その他、全各号に付帯する事業。 NTTドコモ北海道植樹活動コーディネーター【NTTドコモ北海道】 当別家族【農村都市交流研究会】		

活動事業費(平成17年度) 48,272,403円

政策のテーマ 「一つの町に一つのネイチャーセンターを」
持続可能な社会作りのためのオルタナティブな暮らしと教育

- 政策の分野
 - ・ 自然環境の保全
 - ・ 持続可能な地域づくり
- 政策の手段

団体名：
NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティ
担当者名：山本幹彦

国立公園や国定公園のビジターセンターを豊かな自然をフィールドとした環境教育の場として捉え、そこでの施設のデザインを豊かな生態系のお手本を学ぶ場として位置づけ、また、コミュニティにネイチャーセンターを作り、日常の中での自然をフィールドとした環境教育施設として、自然との一体となった暮らしの実感を持つきっかけ作りの場として位置づけ、持続可能な社会を形成していくためのオルタナティブなライフスタイルを習慣づける新たな教育の場とする。

政策の目的

地域の自然を知り、理解することで環境認識を深め、環境に対する態度を養い、参加の機会を設けることで、多様な生物との共存が可能な地域作りから持続可能な社会作りを目指すことを目的とする。

背景および現状の問題点

すっかり私たち現代人は自然から遠ざかってしまった。国立公園は整備され、エコツアーが盛んになり、非日常としての自然体験が増えていくにつれ、日常の中での自然感覚が減ってしまっている。自然が特別な「体験」でないと触れることができなくなっているようにも思えてくる。

環境問題の解決のために教育の果たす役割に期待され、2004年には環境教育推進法が施行された。その中で、現在行われている環境教育の内容を大きく俯瞰してみると、廃棄物やエネルギーといった私たちの社会の仕組みや技術と関連したものと、自然という地球の営みに関したものと大きく分けることができる。廃棄物やエネルギーをテーマとした環境教育ではハウツーに偏る傾向が見られ、グローバルな視点が欠けていることが多く、国際理解や開発といった視点を付け加えて持続可能な開発のための教育といった視点が求められている。また、自然をテーマとした環境教育では、感覚や知識をテーマとした内容といった2つに分けることができ、その中でも感覚をテーマとした内容では情緒的に、知識をテーマとした内容では個々の生態の理解にとどまっていて、そのことが行動変容と結びついているかどうかわかりづらい。

環境教育は個々人の行動の変容を目的としている。そこにはハウツーではない、環境に向き合う姿勢と態度が大切であり、そのために周囲の自然と真正面から向き合い、「この自然がなければ生きていくことができない」といった感覚が個人の行動変容の基底に必要であると考ええる。しかし、自然を対象としてしか見ない今の生活様式ではこのことは願うべくもない。では、このような感覚や価値観はどのようにして培われるのだろうか？ その鍵は国立公園などでの豊かな自然体験と、身近な自然の中で過ごす双方での体験が必要かと考える。それは、豊かな自然の中で営まれている生態系の中で過ごす体験と、日常のコミュニティの中にその生態系を取り戻すための自然体験だと思われる。また、子どもたちは自然の中で育つといわれる。最近では、子どもたちに与える自然体験の意味が叫ばれている。今こそ大人が、子どもたちにしえてやる身近で、簡単な方法がコミュニティに自然を取り戻す活動であり、それは人任せにするのではなく、コミュニティのメンバーが積極的に関わってこそできるものだ確信している。形を作るのではなく、そこに大人のコミュニティに自然を取り戻すプロセスを呼び起こすのである。そのような大人の後ろ姿を必ずや子どもたちはま

ぶしく見つめるに違いない。

では今、国立公園や国定公園のビジターセンターが数少なく残った自然の生態系を、訪ねてきた人たちに豊かな体験を通して伝える施設になっているだろうか？ コミュニティーに身近な自然の窓口となる施設があるだろうか？ 残念ながら、国立公園や国定公園のビジターセンターは自然をテレビなどのスイッチを押すように確かめにやってき、そこには自然の説明はあるが、かけがえのない自然を再認識し、大切だと思わせるようなものはほとんど見受けることができない。ひどいところは土産物屋かと思うようなところもある。

そこで、このような国立公園や国定公園のビジターセンターを人と自然との本当の意味での接点にできないだろうか？ コミュニティーに人と自然の接点となる施設を作ることができないだろうかと考えた。折しも世界遺産やロハスがブームとなるように、環境意識が向上している今、もう少し踏み込んだ環境教育施設としての位置づけが可能ではないだろうか。そのために、今の展示や施設のあり方を見直す必要があるだろう。コミュニティに目を向けたとき、使われていない、使われているが利用されていない施設がすぐに思い浮かぶ。コミュニティの郷土館や博物館、公民館、学校の空き教室といったように。そして、コミュニティには自分の時間をコミュニティの自然に、コミュニティの子どもたちに提供してもらえそうな人たちが多く見受けられる。このような人たちと、施設を上手く結びつける仕組みと仕掛けさえあれば解決すると考えた。

さらに、昨年から国連持続可能な開発のための教育（ESD）の10年がスタートした。ESDのベースに自然との切り離せない生活の実感を持つことは何よりも優先されなければならないと思う。その上で、社会のありようとしての気づきや学びがあり、社会と自然との関係を解決していく道筋が大切かと考える。コミュニティにおける自然との接点、生態系が残っている自然との接点の仕組みの作り直しが必要な時期になっていると、この提案を行った。

政策の概要

持続可能な社会を作っていくためのベースは自然の循環や相互作用の中でしか生きていけないということを十分理解することであると考える。自分を取り巻く自然を自分の環境として認識し直し、自分事として「この自然の中で生きるしかない」という感覚や実感をもって日々の生活をするということでもある。しかし、環境というものはいつも私たちの周りにあるが故に、ついつい忘れてしまう存在でもあり、それ故に、環境を意識化する仕掛けが必要になってくる。そこで、私たちを取り巻く自然を意識化し理解するための窓口として活動を展開する国立公園や国定公園のビジターセンターの環境教育にふさわしいリデザイン（展示やガイドのインタープリテーションの理論に基づいた管理・運営の見直し）と同時に、コミュニティの持続可能な開発のための教育施設として、地域に一つのネイチャーセンターを設置し、コミュニティにおける持続可能性を実現することをこの政策の目標とした。

この中核を担うのが市民やコミュニティの住民である。豊かな自然が残る施設では都会の市民が支え、コミュニティでは地域の住民が支えるのである。それは、出来上がった施設を支えるのではなく、できる限りの物を住民参加で作リ、管理し、運営していく仕組みを作っていく。初めは専門家の支援が欠かせないが、徐々に専門家の関わる割合を減らしていき、最終的には、プログラムも展示も最低限の専門家の手助けを得ながら自分たちで支えていく仕組みを作ってしまう。同時に、この分野での専門家としてできるだけ若い人材を登用し、若者に地域へ定着し、地域にアイデンティティを持たせる仕組みを作ることで、ニート対策としても活かしていくことが可能かと思われる。

具体的には、住民参加のワークショップを行いながら、時間と手間は初めのうちはかかってしまうかもしれないが、一部の住民の熱意、熱意の連鎖、運営の広がり、管理の簡素化、地域の活性化と徐々に計り知れない効果を発揮するものかと期待される。国立公園や国定公園のビジターセンターでは、展示やガイドウォーク、プログラムをワークショップスタイルで作っていくと同時に、自分たちでもできるだけ能力を身につけ、市民の主体的な運営を可能とし、コミュニティのネイチャーセンターにおいてもコミュニティの住民主体のワ

ークショップにより施設のデザイン、プログラム、展示、自然調査を行うことで、人々の自然への関心や態度を変え、オルタナティブな生活様式を創造することが可能とさせることができる。また、このような施設では、積極的に学校教育と関わり、住民が学校教育に関わるきっかけとしていくことができる。

政策の実施方法と全体の仕組み（必要に応じてフローチャートを用いてください）

1) 国立公園や国立公園のビジターセンター

国立公園や国定公園は単なる貴重で珍しい自然を見せるところだけではなく、国の宝物としての豊かで貴重な自然をビジターセンターやプログラムを通して、自然の営みを伝え、大切にしていける心育て、自然を守り、その自然の中で過ごすことが楽しくなり、その方法を実践できる人を育てていく使命があるといえることができる。その使命に沿った形で施設の運営と管理を行うために市民参加のワークショップを実施する。そのテーマは、「インタープリティブ・デザイン・ワークショップ」と「ハンズオン展示ワークショップ」「インタープリテーションワークショップ」という2つのワークショップを実施する。

インタープリティブ・デザイン・ワークショップ

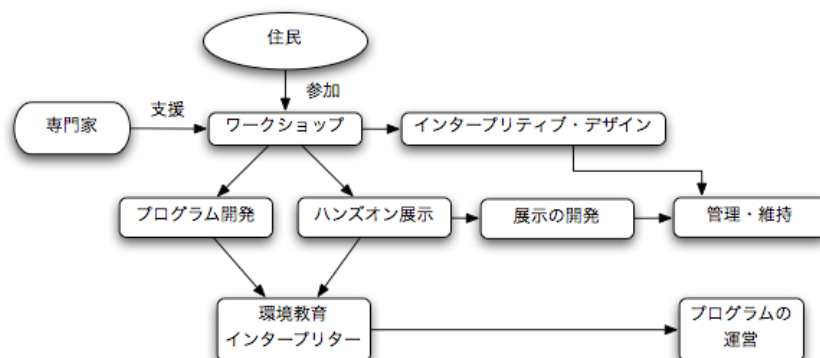
施設を環境教育という本来の使命に沿ったものにしていくとき、展示やプログラムを別々にデザインするのではなく、全体のグランドデザインが使命やその場所の特徴に沿ったものにしなければならない。そのためのノウハウとして、インタープリティブ・デザインという新しい手法がアメリカにある。これは、今までのインタープリテーションの手法が伝えて側からの発注で作られているものに対し、来園者中心の考え方とするもので、勉強的に伝えるのではなく、楽しみやってきた来園者にワクワクさせながら伝えたいことに導いていく手法として、新しいビジターセンターの考え方だと思われる、その手法をいち早く導入しようというものである。さらに、ワークショップ形式で行うことで、市民のアイデアや能力を活かすと同時に、専門家の手を頼らずに自分たちでデザインできるノウハウを身につけることで、季節に応じたデザインや、回転が速く数多く、多様なニーズに合った、なおかつ経費を削減した運営が可能となる。

ハンズオン展示ワークショップ

人は豊かな体験を求めて国立公園や国定公園へやってくる。その自然の中での体験をより豊かなものとするための体験型の展示としてハンズオン展示を市民参加のワークショップで作っていく。展示はどこにでもある同じような展示ではなく、私の経験から、その地域やフィールドにあった内容のものを、手作りでもお金をかけていないところの方が素晴らしいものが多い。そのために、人にお金をかけて、展示そのものにはお金をかけなくても素晴らしい展示が作れると同時に、市民参加で進めることで、展示の補修や新しい展示作りが簡単に実施することができる。

インタープリテーションワークショップ

ガイドウォークなどのインタープリテーションプログラムはすでに日本においてもそのノウハウは蓄えられてきている。また、このような自然の中のビジターセンターで働きたい、またはボランティアで活動したい人材は潜在的におられ、このような人材を有効活用する方策として、また、新たな生き甲斐の創出として位置づけながら実施することができる。



2) コミュニティーにおけるネイチャーセンター

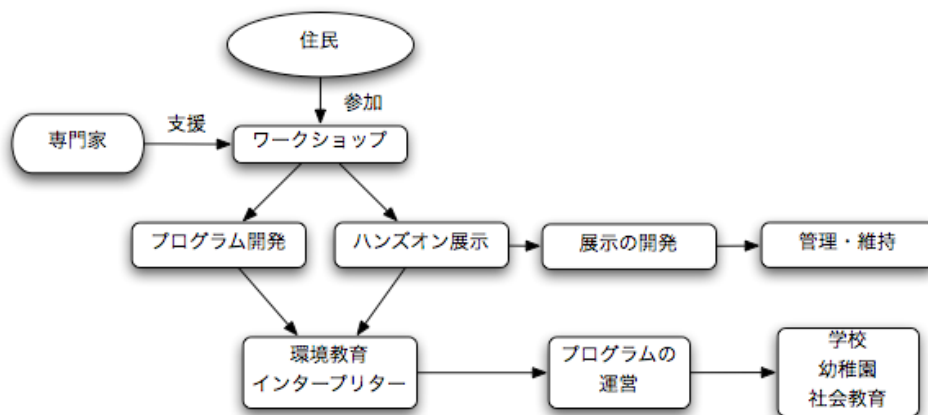
人はコミュニティにおける自然との体験を通してライフスタイルを変えることができるのだろうか？ それはレイチェル・カーソン女史のセンス・オブ・ワンダーを読めば簡単にわかる。そのポイントは、大人が自然の中での体験を通して、自然を守っていく活動を生き生きと行うことと、その後ろ姿を子どもたちに見せ、その自然の中での体験を子どもと共有する仕組みを作ってやればいい。そのために、コミュニティの中にネイチャーセンターを設けると同時に、そのネイチャーセンターを基地として近くに子どもが体験できる自然を大人の手で作ってやるのが大切かと思う。そのためには、地域の住民がコミュニティに向き合うことがポイントかと思われる。そのために、以下のプログラムを提案する。

ハンズオン展示ワークショップ

地域の人々が地域の自然と向き合い、表現する展示を作るプロセスから住民は自然と向き合い、自然と関わり、それ自体が大きな教育効果を発揮すると同時に、その人たちが出来上がった展示物を管理する組織作りを同時に行うことで、展示のメンテナンスと新たな展示作りが簡単に行うことができる。

インタープリテーションワークショップ

ネイチャーセンターでの活動を多くの人たちに知ってもらわなければならない。しかし、多くのネイチャーセンターが自分たちの満足で終わっているケースが多いが、本当に大切なのは、多くの人にネイチャーセンターを通して自然に関心を持ってもらうための仕掛けである。その手法をインタープリテーションに求め、一般住民から学校の授業までを対象として、自然体験を中心とした環境教育プログラムを提供する仕組みを作り、将来的にはNPO法人などの組織による運営を目指すことも可能かと考える。



政策の実施主体（提携・協力主体があればお書きください）

1) 実施主体：NPO法人 当別エコロジカルコミュニティ

NPO法人 当別エコロジカルコミュニティではアメリカで開発された体験を通した環境教育プログラムを中心に活動を行っている。その中でも、インタープリテーションやネイチャーセンターのデザインや管理・運営について、国営公園における環境教育に基づいた基本構想作成や人材育成、プログラム開発について長年にわたって行ってきたノウハウを持っており、それを有効に活用して事業を実施していく。

2) 協力主体

Cibolo nature center TEXAS

全米で最優秀ネイチャーセンターに選ばれたテキサスにある小さな手作りのネイチャーセンターである。このネイチャーセンターの良さは、多くの住民が関わって育てていくア

イディアとネットワークを持っていることである。現在、このネイチャーセンターのディレクターの著書である「The Nature Center Book」を翻訳中で、どのようなことでも協力してもらえる関係を持っている。

政策の実施により期待される効果

1) 環境教育の推進を飛躍的に推し進めることができる

環境教育の目標は個々人の行動変容であり、学んだことを日々の生活の中に習慣化することが大切である。そして、この習慣化を促す鍵が身近な自然の中での体験であり、子どもだけではなく、大人が率先して自然に関わっていく仕組み作りが必要かと思われ、そのために住民参加のワークショップによって環境教育に必要な三要素である「フィールド（施設・野外）」「人材」「プログラム」を開発し、また、ワークショップ自体が重要な学びの場として地域の環境教育（持続可能な開発のための教育）を推し進めていくことになる。

2) 地域の活性化

コミュニティでは地域の人たちが自分たちで地域に目を向け、地域と向き合わない限り、いくら地域活性化のアイデアを出し合っても活性化は起こってこない。そこで、地域の自然に目を向け、地域の人たちと積極的に関わっていくネイチャーセンターが触媒となり（多くのネイチャーセンターが自然には目を向けているが、人には目を向けていないのが大きな問題。）、地域の活性化を下支えするようになる。

3) 学校教育の変革

総合的な学習の時間に多くの学校が苦慮している。地域のゲストティーチャーが学校の授業を豊かなものにはしているが、本来の目的である「教科の授業で身につけた生活する上での道具を使う時間」といった総合的な学習の時間にはほど遠い。そこで、地域のネイチャーセンターが単に自然を体験するところから、地域の人たちの主体的な取り組みによるセンターが核となり、学校とのコーディネーターとしての役割を担い、地域の自然を守る具体的な取り組みに参加しながら、総合的な人間力を育てる施設と発展していく。

4) 類似施設への波及

一般の人たちへ教育的な施設はネイチャーセンターだけではなく、博物館、美術館、動物園、植物園などさまざまな施設があり、どこも展示やプログラム、ボランティアを育成し、運営管理している。それらの類似施設へ環境教育的なアプローチを提示し、さらなる環境教育拠点を増やすことができる。

その他・特記事項

1) 提言の位置づけ・意味

今までもビジターセンターやネイチャーセンターをテーマにした取り組みは多く行われてきた。国立公園のインタープリテーションプログラムの開発、自然ふれあい施設の設置、人材養成と素晴らしい取り組みが成果を上げているが、それらを統合し、地域に密着させ、すべての類似施設を関連させようという試みである。

2) Institute of Earth Educationのインタープリティブ・デザイン

Institute of Earth Education(IEE)アメリカに本部を置く環境教育団体として、世界中で独自のプログラムを展開すると同時に、インタープリティブ・デザインの方法を開発し、ワークショップを世界中で開きながら人材の育成に力を注いでいる。IECでは10年以上前より（IEC代表の山本が主体となって行っている）IEEの代表であるスティーブ・バン・メーター氏を日本に招き指導者養成ワークショップを行っている。インタープリティブ・デザインについては2003年より毎年日本でワークショップを開催して指導者の養成を行ってきていて、日本中にワークショップを受講し、ノウハウを身につけた人材のネットワークがすでにある。